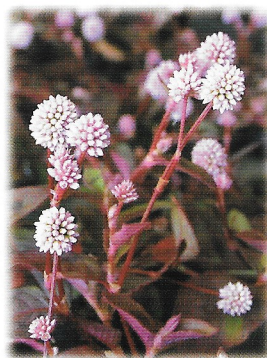


近代盆栽



11

2012

KINBON

From Japan to the World

適期特集

枝抜き・針金かけをやってみよう!

昭和53年3月2日 第3種郵便物認可
平成24年11月1日発行 (毎月1回1日発行)
通巻421号

頒布関連企画 石付創作コンテスト 特別実技 杜松 素人づくりからの脱却

不定期連載
ザ・バーゲン
期間限定・特価名品
盆栽お助けマン参上!

近代盆栽美術館
珍樹種で楽しむ
秋の風情

本誌独占
小品・貴風
大オークション
直前情報

連載
悠久の森季香
小品百科
巨木を訪ねる
盆栽の図像学
姫柿三十年譜



適期特集

枝抜き 針金かけ

をやってみよう！



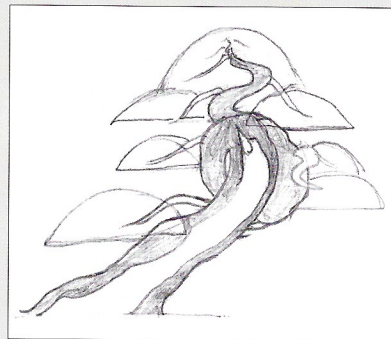
秋から冬にかけては盆栽が最も美しく見える季節。剪定や針金かけなど、思い切った仕事ができるタイミングでもあり、愛好家にとっては盆栽と触れ合える最も楽しい時期と言えます。しかし剪定が伴うこれらの作業は初級愛好家にとっては非常に難しく、なかなか思い切れないもの。

本企画では、改作作業に伴う太枝・小枝操作や枝棚作りのコツ、また初心者を対象とした針金をかけるコツなど整姿の基本から応用までを幅広く紹介。針金かけをマスターして愛樹のさらなる樹格向上を図りましょう！

差し枝の不自然さを解消する枝操作

盆栽として長年持ち込まれた古木でも、現状の姿で完成というわけではありません。正面や植え付け角度の変更など新たな視点で素材を見れば、さらなる樹格向上の可能性が拓けてくることは、これまで本誌で取り上げてきた改作実技でもお分かり頂けるでしょう。ここに紹介する五葉松もそうし

た素材の一つ。鉢持ち込みの古さを物語る幹肌と幹を貫くように入ったウロを見所として、きれいに整えられた輪郭から一度は観賞段階まで仕上げられたことが窺えます。しかし、プロの目にはまだ修正すべき部分が見えていました。それは利き枝の場所です。



作業前に漆畑氏が描いた直筆のイラスト。漆畑氏は作業前にいつもこのように構想をイラスト化する。

冒頭でも少し触れたように、この素材の魅力は幹を縦に裂くように入ったウロと幹肌の古色、さらに最上部から大きく模様を描きながら落ちてくる枝の形状にあります。ただ現状ではウロが充分に見えておらず、枝の捻転部の個性も活かされておらず、言い難い状態です。前蔵者もその点を修正すべく正面を反時計回転に振ってウロが見える場所を新正面として、枝を作り直そうと試みた形跡も見られます。

ただ、漆畑氏は樹形のポイントとなる右下の差し枝について「出方が不自然なんですよね。後方から枝をたぐるように無理矢理持ってきているから、とってつけたような違和感を感じます。この点を修正すれば、もっと自然な姿に仕上がるのではないでしょうか」と問題点を指摘しました。

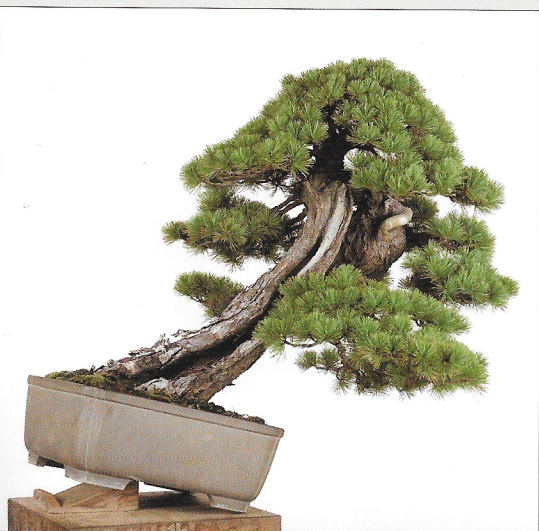


五葉松 樹高60cm左右62cm 作業前正面

上部で捻転する幹模様。シャリも噛んでおり、迫力充分。見所として強調したい部分である。



差し枝は裏側から引っ張ってきているために、このようにループした形状をしている。不自然な印象を与える要因。



新正面構想

ウロが見える面を正面とし、植え付け角度を傾けて幹の流れを強調する。さらに右下の差し枝を左側に持っていき、逆差しの模様木とする構想である。

太枝移動の準備 枝に割りを入れて芯を抜く



割りを入れたのは枝の移動を容易にするための措置。ラフィアで固定したら8番線の2本使用で枝曲げの準備終了。



曲げる位置に割りを入れたら、今度はラフィアを使って縛り、枝が折れないように養生する。



枝のセンターに切り込みを入れないと枝が折れる可能性がある。慎重に作業する漆畑氏。



刃先が真っ直ぐなコブ切りを使い、枝に対して水平に切り込みを入れていく。

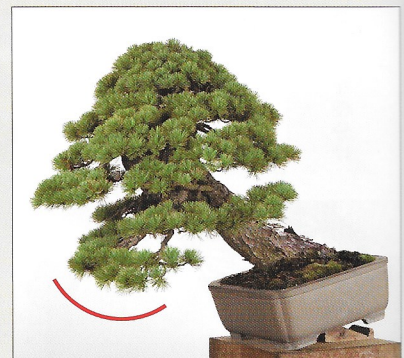


渾身の力でゆっくりと枝を動かす。強くすると折れることもあるので、音を聞きながら慎重に作業。

漆畑氏がイメージした樹形構想は、旧正面から反時計回転に少し振った位置で、植え付けを右側に傾ける斜幹樹形構想でした。しかしこれだけでは右下の差し枝の問題が改善されたとは言えません。その点を漆畑氏に確認すると「裏から回っている右の差し枝は、方向を変えて左側に流そうと考えています」とのこと。差し枝を右に置くのではなく、幹に添わせるように左側に伸ばす、いわゆる「逆差し」と呼ばれる形状の枝にしようという構想です。

差し枝を右側に作るために、長い枝をたぐってループ状の形にしたのが不自然さの理由。ならばその長さを活用して左側に伸ばせば、違和感なく仕上がるという考えです。しかし古枝の向きを正反対に変える必要があるので慎重な作業が求められます。枝に負担がかかる位置には予め割りが入れられ、さらにラフィアでしっかりと固定の措置が施された後に、枝移動の作業が始められました。

差し枝が反対方向に移動した!



作業前・裏面

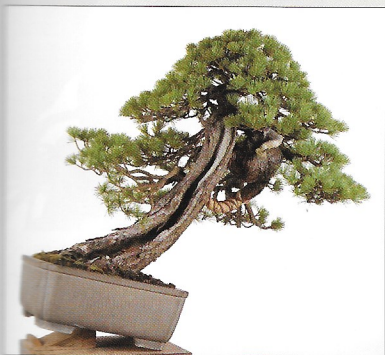


右側の差し枝が幹の裏側を通過して移動したことが確認できる。



枝移動後・正面より

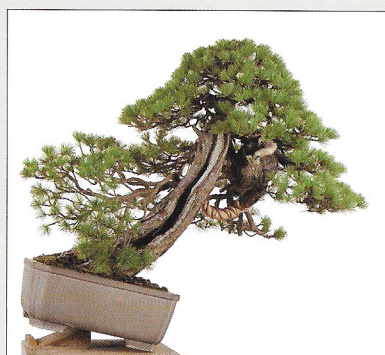
左差し枝の剪定・整姿



左枝・剪定後
樹冠部の輪郭に合わせて枝が短く切り詰められた。このラインで枝をまとめていく。



枝先を持ち上げて輪郭を確認。やはり少々長すぎるようだ。



左枝・不要枝整理後

左枝の剪定と整姿

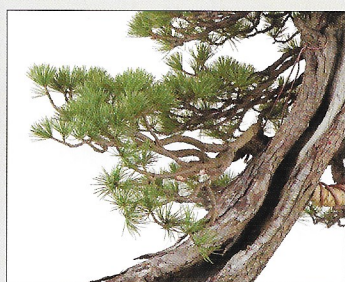
枝を伸ばすようにして左方向に移動された問題の差し枝は、枝先が左側の立ち上がり付近の位置までの長さとなりました。枝の中ほどで模様を入れています。枝の中ほどの大振りな葉張りの縮小は難しそう。しかし枝を長めに伸ばす逆差しの枝といっても、ここまでの長さは必要ないでしょう。

おおよその輪郭を確認した漆畑氏は枝芯を切断してフトコロの細い枝に立て替え、葉張りの縮小を図りました。さらに枝先は複数の枝棚に分割し、ハズミを感じる枝表現とされました。

左枝・整姿後



左枝・整姿前



同・修正後
枝にハズミが出るように、細かな棚分けが施された。



左枝・作業前 上から

整姿後・同
扇形になるように形が整えられ、さらに小枝が重ねられて短い節間で枝棚の厚みが出るように枝先が配置されている。

右
枝
群
の
整
姿



輪郭は整えられたが、漆畑氏は樹冠部の右側の枝棚に不満の様子。幹の個性が隠され、右側の力がやや強く感じるのがその理由である。

幹の流れは大きく右方向に向かっています。盆栽としてのまとまりを考えると樹冠部は左に返してバランスを取る必要があります。これまでは右に差し枝があった関係で長めに伸ばされていた右枝群も、左の差し枝を強調するようにコンパクトな輪郭に修正されました。

一旦輪郭が整えられた段階で、改めて全体を確認。輪郭は問題ないようですが、見所の一つであった捻転する幹模様が見えなくなってしまっているのが気になります。樹冠部付近の枝なので前枝などを外しすぎるとバランスが悪くなるのですが、幹模様を隠している枝を一本だけ抜いて、枝棚の形を整え直されました。



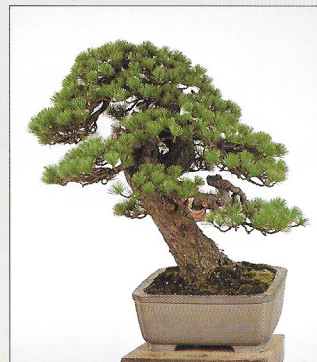
枝抜き・再整姿後



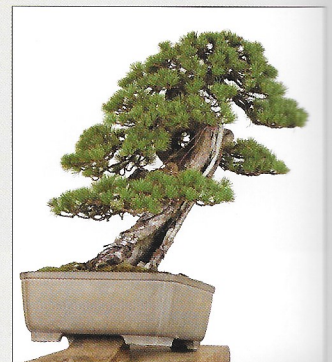
幹の内側に被さっていた枝を動かして、バランスを確認する。これぐらい軽く仕上げても問題なさそうだ。



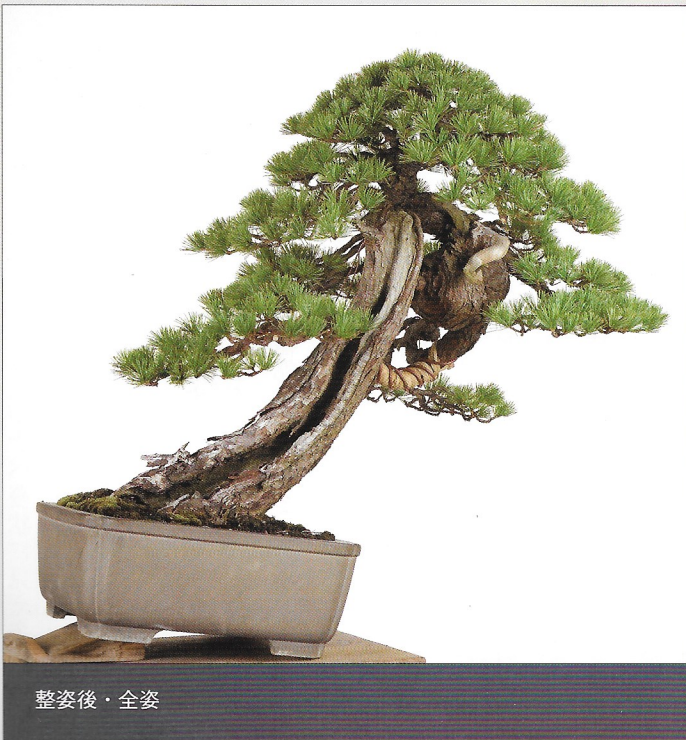
右枝群・第一段階の整姿後



整姿後・右側面より



整姿後・左側面より



整姿後・全姿



枝の組み替えて再生を図る



最終姿 樹高59cm左右63cm (鉢合成)

「差し枝の枝元がナベ蔓状に見えているのが気になります。古木の枝ですから、これ以上無理をすると折れてしまう可能性もあります。時間が経って樹が落ち着いてくればもう少し枝を動かすことができますから、そこで修正を加える予定です。今回は枝の位置を決めて樹の輪郭を出すことが目的で、仕上がりの姿もお分かり頂けたのではないかと思います」と漆畑氏。

役枝を右から左に大きく移動するという施術が施されましたが、それ以外の枝に関してはほとんど抜かれておらず、棚割りやわずかな修正だけで姿がまとめられています。もしこの差し枝を抜いたとしても、理想とする長さになるには数年の時間を要しますが、その上にある枝の最下枝を逆差しの利き枝とすることもできたでしょう。大幅な作業の必要なく樹形構想の変更とわずかな枝操作だけでも十分に樹格向上を叶えることは可能。そのことが分かる実技だったのではないのでしょうか。



作業前の樹姿